

動詞の種類と「ようになる」の共起

—動詞の種類による共起制限について—

江 田 すみれ

1 はじめに

「ようになる」は誤用が見られる形である。本稿は誤用が、一つには、「ようになる」がどのような動詞と共に使えるかということの整理が不十分なために起こるのではないかという考えを述べる。

母語話者・学習者の書き言葉・話し言葉のコーパスを用いて「ようになる」の使用状況を調べ、「ようになる」の誤用の原因を探り、それらに共通する問題の一つが述語のとらえ方にあることを述べる。

2 先行研究

2.1 「ようになる」

庵 (2000) は「ようになる」は「それまで存在しなかった状態が現在は存在することを表す、とし、意志動詞を使っても意志的な動作を表さず、自然にそうした状態に至ったことを表すとしている (p.75)。

市川 (2005) は「ようになる」は「状態の変化」であり、「時間をかけて習慣・能力が身につく」という意味合いを持つことが多い (p.240) と述べている。そして前接するものについては、「ようになる」は意志動詞・無意志動詞どちらにもつき得ると説明している。初級を教える人のための文法書であることから、「時間をかけて習慣・能力が身につく」という身の回りのことを述べる説明にしているのであろう。しかし、「習慣・能力が身につく」という説明は、「ようになる」の意味の一部しか取り上げておらず、初級の学習者には理解しやすいであろうが、中級以降になった場合はもっと広い意味を教える必要がある。

安達 (1997) は変化に二つのタイプがあるとしている。「一つは変化前の状態と変化後の状態が連続的につながっている」もの、もう一つは「二つの状態が断絶のあるものとして捉えられているタイプ」(p.72) である。このうちの前者を進展性のある動詞としている。

そして、「ようになる」は「状況が進展的に変化していった埋め込み節で表される事態に至った」ことを表す (p.80) としている。埋め込み節には

[1] 進展性を内在していない事態

[2] 意志的でない事態

がくるとしている (p.81)。進展性を内在する動詞は「てくる」によって進展性を前面化するのに対し、「ようになる」は進展性を持たない事態に進展性を付与する形であると述べている。

? (1) 私はだんだん疲れるようになった。

(2) 私はだんだん疲れてきた。(例文1-8 安達 適不適の判断も安達による)

安達 (1997) は (1) のように進展性を内在する動詞を使った場合は複数の事態による習慣の定着としてなら許容されるとしている。同様に [2] の、事態が意志的であるか否かについても、

(3) 私は本を読むようになった。

は習慣が身についたという意味でなら許容されると述べている。

進展する事態 (状況) は主体の意志によってコントロールされない事態であり、以下のようなものがあると述べている。

1) 非情物を主語とするケース

(4) 冷戦が終わったあとは経済問題が大統領選挙の行方を左右するようになって
いる。

2) 受動文によって対象となる非情物を主語に昇格するケース

(5) サッカーの愛好者の姿が見られるようになった。

3) 可能文によって表されるケース

(6) 日常会話がようやく話せるようになった。

4) 思考動詞

(7) 「これからが大変だ」と思うようになった。

5) 複数の出来事によって表されるケース

(8) ずいぶんいろいろな客がやってくるようになった。

池上 (2002) は「ようになる」に前接する語を状態性述語と非状態性述語に分け、状態性述語の場合、「ようになる」は状態の変化を、非状態性述語の場合は習慣・繰り返しを表す、と短くまとめている。これは理解しやすいと考えたが、池上 (2002) の状態性述語とは「状態動詞、知覚・思考動詞、属性動詞 (山岡 (1999/2000) による。役立つ、目立つ、好む等)、および「住む、勤める、仕える」のような「長期にわたって持続する動きを表す動詞」(川口他1991) 等である」としてあり (p.17)、「立つ・好む」「住む・勤める・仕える」を状態動詞に含める考え方は納得がいかない。

江田 (2015) は母語話者による新書の文章、会話コーパス、学習者の『日本語学習者作文コーパス』を用いて「ようになる」の使用時の誤用、非用の例について検討している。その結果、日本語教科書の「ようになる」を主に「技能の獲得」として提示するのは意味を狭くとりすぎた扱い方であると批判し、「ようになる」は時間をかけて起こる変化を表すアスペクト表現であるとまとめ、学習者の誤用の問題を解説している。しかし、江田 (2015) は学習者コーパスを1種類しか使っておらず、学習者の「ようになる」の使用状況を十分にとらえ切れなかったとは言えない。

本稿は日本語教科書の扱い、母語話者の新書と会話のコーパスの「ようになる」の例文、学習者の数種類のコーパスの「ようになる」の例を比較し、学習者がどのように「ようになる」を使

用しているかを確認する。その上で、学習者の誤用を防ぐために、どのように文法的な整理をすればよいかを考える。

2.2 日本語教科書での「ようになる」の扱い

植松（2012）は日本語教科書、文法解説書における「ようになる」の例文を集め、その結果を以下のように述べている。

前接する動詞の形では表1のように可能の意味を表すものが85%を占め、辞書形は15%にとどまっている。

意味の上では、植松は教科書に現れた例を「技能の獲得」「慣れの獲得」「環境の変化による利便性の獲得」「習慣・傾向の変化」の4つに分類し、技能の獲得が67%と多いこと、「環境の変化による利便性の獲得」が7%と少ないことを示している（pp.31-33）。

初級教科書は「ようになる」に前接する述語が可能表現、意味としては技能の獲得、とかなり偏った教え方をしていることが明らかになった。実際の日本語母語話者の「ようになる」の使用はどのようであろうか。また、学習者はどのように使っているのだろうか。

表1 「ようになる」に前接する形

前接する形	例数	割合
動詞の可能形	61例	80%
「わかる」	4例	5%
動詞の辞書形	11例	15%
合計	76例	100%

表2 「ようになる」の意味と場面設定

意味	例数	割合
技能の獲得	51	67%
慣れの獲得	9	12%
環境の変化による利便性の獲得	5	7%
習慣・傾向の変化	11	14%
合計	76	100%

表1・表2は植松（2012）より

3 コーパスによる調査の方法

「ようになる」について、学習者と日本語母語話者の使用状況調査を行った。

学習者の使用調査は、書き言葉では『日本語学習者作文コーパス（作文コーパス）』『多言語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）』の書き言葉部分を用い、話し言葉では『多言語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）』の話し言葉部分、『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス（C-JAS）』、『タグ付きKYコーパス（KY）』を用いた。

『日本語学習者作文コーパス』は中国語母語・韓国語母語の二言語の学習者による二つのテーマの作文データが収録されている。初級から上級の日本語学習者304名の作文データが収録されており、総語数は113,554語である。作文のテーマは、「外国語が上手になる方法について」（192名分）と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」（112名分）である（『日本語学習者作文コーパス』使い方）。

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS; International corpus of Japanese As a Second language）』の第一次データデータとして公開されたデータは、12言語の異なった母語の海外における日本語学習者（180名）、国内の環境の異なる日本語学習者（30名）、合わせて210

名、日本語母語話者のデータ15名、合計225名の発話スクリプトと音声および作文（任意参加）とのことである。

データは、6種類12タスクで構成されており、発話については、4種類；ストーリーテリング（2タスク）、対話、ロールプレイ（2タスク）、絵描写の合計6タスク、作文については2種類；ストーリーライティング（2タスク）、作文（4タスク）の合計6タスクがあるとのことである。作文調査では、パソコン等を使用して作文を書いてもらい、データを収集したとのことである。タスクはメール文（3タスク）、エッセイ（1タスク）とのことである（I-JAS 研究詳細）。

本稿では上の参加者のうち、教室環境の学習者のデータのみを使い、国内の自然習得者のデータは排除した。教科書の説明と学習者の使用の違いを調べたいと考えたためである。

上のデータの話し言葉部分、つまりストーリーテリング・対話・ロールプレイ・絵描写の話し言葉は話し言葉として採用し、メール・ストーリーライティングは書き言葉として使用した。なお、ストーリーテリング、ロールプレイなどは、複数のタスクがあると説明に書いてあるものが、今回の公開は一つのタスクのみであった。メールはまだ公開されていないようである。

C-JASは中国語・韓国語母語の日本語学習者の発話データを縦断的に記録したものである。データ概要は以下の通りである。

学習者は中国語母語話者3名（C1～C3：女性）、韓国語母語話者3名（K1～K3：女性1名、男性2名）で、学習環境は日本における教室環境である。学習者は1年目は同じ日本語学校に在籍し、2年目以降はそれぞれ大学、専門学校、語学学校に進学した。

日本語学習開始後約3ヵ月から約3年間、3～4ヶ月ごとに調査したとのことである。データの内訳は1人につき7～8回（1回約60分）、日本語母語話者との自由会話形式（調査期ごとに共通の話題を設定）で会話をし、そのデータをコーパスとしたものである。データ量は47本（計約46時間30分 約57万語）とのことである（C-JASマニュアル）。

『タグ付きKYコーパス（KY）』はOPI（Oral Proficiency Interview）のデータを文字化したものをコーパスにしたものである。内容はOPIのインタビューで、初級5名・中級10名・上級10名・超級5名の、中国語話者30名、韓国語話者30名、英語話者30名の話し言葉である。

以上のコーパスを使い、文字列検索で「ようにな」で検索をかけて用例を抽出した。その際、本来は「名詞+になる」「形容詞+くなる」になるはずの文を間違えて「ようになる」で文を作ってしまったものは採用しなかった。

日本語母語話者の使用状況調査は『CASTEL/J』の新書コーパスと『男性のことは職場編』『女性のことは職場編』『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』によって行った。

『CASTEL/J：Computer Assisted System for Teaching & Learning / Japanese』は日本語教育支援システム研究会によって開発された日本語教育に活用できる様々なデータとデータベースで、多種の辞書と新書、白書、地理・歴史・公民の教科書、『男はつらいよ』のシナリオなどが収納されている。本稿ではこれらのうち、新書を用いた。新書は、学習者が大学に入った場合、最初に入門書として触れる可能性のある書物であることから調査対象として選び、科学的な文章コーパスとして扱った。社会科学と自然科学のテキストを対象とした。

『男性のことは職場編（男性）』『女性のことは職場編（女性）』は研究者が調査に協力してくれ

る人に依頼してテープレコーダーを身近に置き、職場での会話を録音してもらったものである。協力者とその周辺の人物の会話が「朝」「休憩」「会議」の場面で録音され、データ化されている。協力者は教員・大学教員・公務員・会社員などである。『男性のことは職場編』は11099行、728分（約12時間）、『女性のことは職場編』は11421行、552分（9時間12分）である。

BTSJは宇佐美まゆみ氏考案の日本語会話を文字化する基本的な方法である。そのBTS (Basic Transcription System) を用いて母語話者間の会話、母語話者と外国人の接触場面を文字起こしし、コーパスとしたものである。初対面の会話、依頼の会話、論文指導などが含まれている。今回は母語話者同士の会話を用いた。

母語話者のコーパスには検索ツールがないので、検索ソフトはKey Word in Context (KWIC) Ver.3.29eを用い、「ようにな」で検索した。

資料は表3表4のとおりである。語数は文章作成ソフトWordの「情報」ウインドウに表示される語数でカウントした。

「ようになる」はすべて原文で文脈を確認し、正用・誤用の判断をした。形式的に正しくても文脈の中で適当でない場合は誤用とした。江田（2015）では『学習者作文コーパス』の学習者の使用について、全文を読み、「ようになる」を使うべきところに使っていない例は非用として採用しているが、今回は、コーパスの文章全体を読んで非用を探すことはしなかった。

4 調査結果

4.1 母語話者の「ようになる」に前接する述語

安達（1997）は「ようになる」の埋め込み節を以下のように分類している。

- 1) 非情物を主語とするケース
- 2) 受動文によって対象となる非情物を主語に昇格するケース
- 3) 可能文によって表されるケース
- 4) 思考動詞
- 5) 複数の出来事によって表されるケース

上の分類法は1) 2) が主語を問題にし、3) 4) が述語、5) が出来事、と基準がまちまちである。また、二つの要素が関係する場合はどのように分類されたかが明らかでない。例えば非情物を主語とする可能文や、(9) のような思考動詞を使った可能文はどのように分類されるのであろうか。

表3 科学的な文章コーパス

コーパス名	語数
日本人の法感覚(法感覚)	100,107
近世の日本（近世）	106,224
日本の企業発展史（企業）	154,316
進化論が変わる（進化論）	99,642
睡眠の不思議（睡眠）	89,687
化学とんち問答（化学）	103,894
時間の不思議（時間）	99,837
合計	753,707

表4 会話 コーパス

コーパス名	語数
男性の会話職場編（男性）	166,228
女性の会話職場編（女性）	205,795
BTSJ会話（BTS）	441,831
合計	813,854

(9) 考えるようになった。(作例)

本稿では分類に関しては埋め込み節というとらえ方ではなく、「ようになる」に前接する述語の形によって分類する。例えば思考動詞を使っている、可能形であれば可能表現に含めた。

本稿の分類は以下のようである。

- 1) 無意志表現
- 2) 受け身
- 3) 可能表現
- 4) 思考動詞
- 5) 意志表現

以下にそれぞれの例をあげる。

(10) 遺伝子が、突然変異によって再びはたらくようになったとも考えられる。(無意志表現) (進化)

(11) 断続平衡説は、あっという間に広く知られるようになったのである。(受け身) (進化)

(12) 複雑なものを複雑なものとして理解しうようになった、一般民衆の精神的成長を示している(可能)(近世)

(13) 生活レベルの向上にマッチした賃金要求を少しは考慮するようになった。(思考動詞)(企業)

(14) 高温で飼育すると、水中で交尾や産卵をするようになり、卵はそのまま水の中で育つために、オスは卵を養育する必要がなくなる。(意志表現)(進化)

(11) のように動詞自体は意志動詞であっても文中では無意志的に使われている例が見られたため、意志動詞・無意志動詞という語ではなく意志表現・無意志表現という語を使った。その結果が表5である⁽¹⁾。

表5を見ると、二つのことがわかる。第一に、表3表4で見たように、会話と科学的な文章の語数は会話のほうが6万語ほど多いのにも関わらず、「ようになる」の出現数は会話でかなり少ないということである。この表現は科学的な文章でのほうがよく使われるものようである。

第二に、会話と科学的な文章で前接する述語の分布が異なることである。科学的な文章では「ようになる」の前に、受け身、意志表現、無意志表現、可能表現など、多様な表現が使われており、可能表現の割合は13%ほどであるのに対し、受け身は42%を占める。意志表現・無意志表現を合わせると43%になる。一方、会話では可能表現を使った例が55%、意志表現を使った例が25%であった。

初級教科書で「ようになる」が可能表現に接続すると教えることは、初級では会話ができるよ

表5 「ようになる」に前接する述語

	科学的な文章		会話	
	例数	割合	例数	割合
無意志表現	25	14.0%	5	12.5%
受け身	75	41.9%	1	2.5%
可能表現	23	12.8%	22	55.0%
思考動詞	4	2.2%	2	5.0%
意志表現	52	29.1%	10	25.0%
合計	179	100.0%	40	100.0%

うになることを目的としていると考えれば、意味があると言える。しかし、中級以降、書き言葉を学ぶ場合は「ようになる」に前接する述語はもっといろいろな形を教えなければならないことがわかる。

4.2 「ようになる」の意味—複数の事態による変化

会話での「ようになる」の例を見てみよう。

会話では、個別的な主体による変化の例は以下のような例であった。

- (15) 彼女になりそうな時に（中略）、けど、（うん Inf（女））違うなっと思えるようになったのね。（女性）
- (16) （あの子は）土曜日あんでできて、できるようになったからだいじょうぶだろうと思って、（うーん Inf（女））テストやったんですよ（女性）
- (17) はい、これからも毎日、あのおんなじように仕事していけば {うん、うん (15B)}、<笑いながら>食えるようになるだろうとゆうことで、はい。（男性）

会話では個別的な主体による「ようになる」の例も見られたが、それらの例でも（17）のように「毎日食える」というように、繰り返し・習慣を含んでいる例も見られた。

科学的な文章では「ようになる」は以下のように使われていた。

無意志表現

- (18) 共同体が弛緩しこわれ、新しい都市が発達するようになると、民衆の自主性行動性はたかまり、その行動の多様化や気心の複雑化が進行する。（近世）
- (19) 大企業が産業発展の有力な担い手となるのは、産業革命による工業化が定着し、企業の統合と規模の経済性が結びつくようになってからである。（企業）

時間をかけての変化が表現されている。

可能表現

- (20) 西洋の自然科学の原理の一つに、連続的な因果律という概念がある。進化も連続的な因果律で説明できるようになったときに、はじめて科学の仲間入りをした。（進化）
- (21) このことは、複雑なものを複雑なものとして理解しうるようになった、一般民衆の精神的成長を示している。近松の浄瑠璃は、そうした民衆の成長の文芸的形象化である。（近世）

初級教科書で取り上げるのは個人的な能力の変化もあるが、新書で述べられるのは多くの人が関係する社会的な知識や能力の漸進的な変化である。

受け身

- (22) クロマトグラフィーという分別法は（中略）分析手段である。しかし、一般の学者の注目をひくようになったのは、それから20年もたってからで、第二次大戦後にいろいろな方面に活用されるようになった。（化学）
- (23) 18世紀からゴム製品が作られるようになったが、ゴムの欠点は、暑い夏にはやわらかくなってべたつき、寒い冬には硬くなって弾力性が減少することであった。（化学）

動作主が背景化される（庵2007：104）受け身文を使うことにより、多くの人によって「活用

され」「作られる」ことが述べられており、これも社会的な変化、複数の事態による変化を表現しているといえる。

以上のような無意志的な前接表現（無意志表現・可能表現・受け身）を使った例は表5の科学的な文章の「ようになる」の70%になる。

意志表現

(24) 少年時にガモフの書物に心動かされて物理の道を進むようになったという学者も少なくない。(時間)

(24) は個人が意志を持つようになったことが表現されている。しかし、

(25) 共生した嫌気性バクテリアと好気性バクテリアは、お互いに利用しあうことによって、より大きなエネルギーを獲得するようになる。(進化論)

(25) は個別的でない複数の事態の変化が表現されていることが重要と言える。

以上見てきたように、科学的な書物では「ようになる」の多くは複数の事態が起こって時間をかけて進む変化を表している。そういった例は会話においても見られた。池上(2002)も「ようになる」は繰り返しあるいは複数の事態を含む変化であると述べている。科学的な書物では、可能表現を使った例においても社会的な能力の変化あるいは一般的な能力の変化を表現している例が多い。これも複数の事態による変化と言える。

以後、本稿では、「ようになる」を「複数の事態による変化」を表す表現と呼ぶ。

5 学習者の「ようになる」

5.1 学習者の「ようになる」の使用状況

次に学習者の「ようになる」の使用状況を見てみよう。

学習者の「ようになる」を使った文を書き言葉と話し言葉に分けて表示した。作文コーパスとI-JAS書き言葉は書き言葉、I-JAS話し言葉・C-JAS・KYは話し言葉である。表6は「ようになる」に前接する述語を母語話者と同様の基準で分類したものである。

表6 学習者の作文と話し言葉の「ようになる」

	作文		I-jas 書き言葉		I-jas 話し言葉		C-jas		K Y	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
無意志表現	10	8.2%	9	21.4%	10	13.5%	0	0.0%	2	13.3%
受け身	4	3.3%	1	2.4%	0	0.0%	0	0.0%	2	13.3%
可能表現	77	63.1%	4	9.5%	26	35.1%	10	58.8%	7	46.7%
思考動詞	3	2.5%	1	2.4%	6	8.1%	1	5.9%	0	0.0%
意志表現	15	12.3%	15	35.7%	14	18.9%	3	17.6%	4	26.7%
不適當	13	10.7%	12	28.6%	18	24.3%	3	17.6%	0	0.0%
合計	122	100.0%	42	100.0%	74	100.0%	17	100.0%	15	100.0%

まず、出現数を見てみる。それぞれのコーパスで語数がわかるものは作文コーパスの11万3千語、C-JASが約57万語である。作文コーパスに対してC-JASでの「ようになる」の出現数がかな

り少ないことが注目される。日本語母語話者の科学的な文章と会話においても会話では「ようになる」の出現数が少なかったが、それと同様な傾向が見られた。逆に、I-JASの話し言葉は、語数が発表されていないが、ほかの学習者の話し言葉コーパスに比べ、かなり出現数が多い。

それぞれの前接表現の割合をしてみる。KY、C-JAS話し言葉は使用数も少なく、前接の述語の多様性もあるとは言えない。I-JASは話し言葉・書き言葉ともに、可能表現が少なく、述語の多様性がある。I-JASは他の学習者コーパスと異なった傾向を見せている。I-JAS書き言葉の可能表現が9.5%というのは非常に低い数値である。しかし、不適当と分類した12例の中に可能表現を使ったものが5例あり、これらを可能表現と数えると、20%程度となり、I-JAS話し言葉に近い値となり、現在のような極端に低い数値ではなくなる。

次に、表6を書き言葉と話し言葉で集計した。表7である。日本語母語話者の結果を再掲し(表5)、書き言葉・話し言葉の前接述語の分布状況を見てみる。

話し言葉では、学習者には「不適当」つまり正しく使えていない例が20%ほどあるが、それ以外は母語話者と学習者の話し言葉の前接述語の分布の状況は変わらない。KYとC-JASだけではこのような結果は出なかったであろう。I-JASが入っているため、数値が大きく変化した。

書き言葉で比較すると、母語話者は受け身が多く可能が少ない。意志表現も多い。書き言葉では学習者はもう少し勉強するべきことがあると言えよう。

表7 学習者の書き言葉と話し言葉の「ようになる」

	書き言葉合計		話し言葉合計	
	例数	割合	例数	割合
無意志表現	19	11.6%	12	11.3%
受け身	5	3.0%	2	1.9%
可能表現	81	49.4%	43	40.6%
思考動詞	4	2.4%	7	6.6%
意志表現	30	18.3%	21	19.8%
不適当	25	15.2%	21	19.8%
合計	164	100.0%	106	100.0%

表5 日本語母語話者の「ようになる」に前接する述語(再掲)

	科学的な文章		会話	
	例数	割合	例数	割合
無意志表現	25	14.0%	5	12.5%
受け身	75	41.9%	1	2.5%
可能表現	23	12.8%	22	55.0%
思考動詞	4	2.2%	2	5.0%
意志表現	52	29.1%	10	25.0%
合計	179	100.0%	40	100.0%

5.2 学習者の誤用

次に学習者の誤用について見ていく。

江田(2015)は「ようになる」の誤用として以下のようなものを挙げている。

- ① 一回性をもつ意志的な事態
- ② 進展性をもつ事態
- ③ 一般的な事態

今回出てきた誤用例では以下のような問題が見られた。

5.2.1 進展性のある動詞に「ようになる」をつけてしまう

安達 (1997) で述べられていることだが、動詞の中には進展性のある動詞があり、それらは動詞そのものが変化を表すという性格をもっているため、「ようになる」はつけられない。

- × (26) #しかし、そんな食べ物には体に悪いと思う。たくさん食べたら、太るようになって、弱くて、病気になる。#しかも、野菜がないから、栄養が欠けるようだ。(I-JAS) (太って弱くなって)
- × (27) そして外国人と交流する時は私たちは相手の文化や考える方法などを勉強している。それなら、外国語の会話能力は次第に上げるようになると思う。(作文) (上がると思う)
- × (28) モニターを見る時間がふえるようになります。(作文) (増えます)

(26) は「太る」、(27) は「上がる」、(28) は「ふえる」だけで十分である。

進展性を表す動詞には「増加する・減少する・発展する・衰退する」などがある。

寺村 (1982) では「変化というのは、ある存在主体 (X) が、或る状態、初めの状態 (S) から他の状態、結果の状態 (G) へ移行すること」とし、「化ける・扮する・増える・減る」などの語をあげている (p.118)。

日本語記述文法研究会 (2007) は動詞を主体動作か主体変化か、動きの時間的な性質が継続か瞬間かで分類している (p.79)。その主体変化の継続動詞が、継続的であり同時に変化動詞でもある、つまり、徐々に変化することを意味する動詞であり、本稿で進展性のある動詞と言っているものである。これらの動詞は動詞そのものが変化を表すので、一度の変化は「ようになる」をつけてはいけない。

(29) 1 か月で5キロ太った。(作例)

(30) 母は中年になって、水を飲んでも太るようになったとこぼしている。(作例)

(30) は太ったり気を付けたりを繰り返しながらしだいに太っていることを表している。このような複数の事態による変化で「ようになる」を使うべきである。

「ようになる」を教える場合は、学習者にはこのような動詞があるということも一緒に指導できると誤用が少しは減る可能性がある。

5.2.2 結果動詞

結果動詞は動詞そのものが変化を表現する。高橋 (1985) は変化動詞という用語を使い、変化動詞は「変化 (運動) の局面と結果の局面からなりたつ」(p.38) としている。

高橋 (2005) では動作動詞と変化動詞について以下のように述べている。

動作動詞は主体の動作の側面 (運動の形式) をとりだしてあらかず動詞であって、動作後、主体の状態がどうなるかには無関心である。それに対して、変化動詞は、主体の変化の側面 (運動の内容) をとりだしてあらかず動詞であって、運動終了後、主体の状態が変わるところまでを意味の範囲におさめている (p.81)。

この変化と「ようになる」の変化の違いは、結果動詞は一度だけの変化であるのに対し、「ようになる」は繰り返しあるいは複数の事態を含む変化であることである (池上2002)。

学習者の例をあげる。

- × (31) 窓を、窓ガラスを割るよ、それで、窓ガラスは壊れるようになったと思います。(J-JAS) (割れました)
- × (32) お腹がえー、えー、すく、えー、空くようになったら、まー、えー、さんど、サンドイッチを食べてみようと思ったのでした (I-JAS) (お腹がすいたら)

上の例はそれぞれ「割れた」「お腹がすいた」が正しい。一度の変化は結果動詞のみで表す。「ようになる」は複数の事態による変化の場合に使う。しかし、現在の初級教科書の「何かができるようになる変化」のような狭い意味での教え方ではこのような違いは理解できない。

5.2.3 副詞の存在

一方、副詞などによって進行の過程を表現することもある。アスペクトに関わる副詞的成分には、事態実現の時間的な取り上げ方を表す副詞的成分、進行の過程を取り上げる副詞的成分、進行の過程を取り上げない副詞的成分がある（日本語記述文法研究会2007：65-76）が、進行の過程を取り上げる副詞的成分が使われた場合、動詞によって動きの進行中を表したり複数の事態が繰り返して起きることを表したりする。こういった副詞があり動詞に進展性がなければ逆に「ようになる」を使うことを勧めるようにする。

- × (33) インターネットの便利性はもうよく分かっていたが、だんだん新聞などは必要だと思てなった。(思うようになった) (作文)
- × (34) 併し毎日日本語を教えられるとだんだん親しく感じられた。(感じられるようになった) (作文)

進行の過程を取り上げる副詞とは、「次第に」「徐々に」「だんだん」などである。

5.2.4 一般的な事態

科学的な文章では物事を一般化して述べることがある。そして、そのような一般的な事態は非過去形（以後「ル」で示す）で表現される（江田2013：29-32）⁽²⁾。

今回の調査の対象の文章の中ではエッセイの中で一般化して述べる表現が見られた。

- × (35) 我々は食べるものによって作られる身体を持つようになる。(I-JAS) (持つ)
- × (36) 弱くて病気になる。しかも野菜がないから、栄養が欠けるようになる。(I-JAS) (欠ける、十分ではない)

一般化して述べる場合は「ル」で表現されるが、一般的な事態というのはしばしば社会の中で繰り返され多くの人によって共有される事態である。それは時間的に見ると徐々に進展する事態と重なる可能性がある。江田（2015）でも以下の例をあげて疑問を呈している。

- (37) その中でも新聞や雑誌のような記事のスピードを重要とするものはそのあり方にウタガイのシセンを集めるようになった。(疑いの視線が集まるようになった/集まる/集まっている) (作文)

(37) は社会一般の傾向として述べるのであれば「疑いの視線が集まる/集まっている」となり、人々の意識の変化を問題にするのであれば「疑いの視線が集まるようになった」と表現できる。(35) (36) の例でも、多くの人々の身体が食べ物によって作られるということから繰り返しを含み、変化を含んでいると学習者が考えた可能性は否定しきれない。一般化と繰り返しの問題は更に考

えていきたい。

6 変化の表現と動詞の種類

以上見てきたように学習者の「ようになる」はコーパスによって使用頻度はかなり異なるが、ある程度使えているようである。初級教科書が「可能表現+ようになる」という狭い紹介をしているにもかかわらず、学習者は多様な述語とともに「ようになる」を使っているようであることが分かった。

学習者の問題は大きく2点あるようである。

- ① 「受け身+ようになる」の形ができていない。
- ② 動詞の性質と「ようになる」の関係を整理することが必要である。

第一の点は、学習者は、そもそも中級の書き言葉的な、行為者を後退させる受け身がどの程度できているのか、という点が問題であるが、教える側も、意識して「受け身+ようになる」という形を中級・上級で取り上げる必要があるであろう。

第二の点、動詞の種類と「ようになる」の関係について以下に述べたい。

「ようになる」は複数の事態による変化を表す表現である。ここで「ル」「タ」「テイル」のテンス・アスペクトと「ようになる」の関係を整理しておこう。従来、動詞の種類と「ようになる」の使い方は個別的に情報を与えられてきたように思われるためである。

表8は過去・変化・完了・現在・未来・進展性のある変化という項目をたてた。過去・現在・未来はテンスであり、それ以外はアスペクトで、両者をこのように平面的に並べることには少々疑問があるが、整理するための一つの方法と理解していただきたい。

それぞれ、そのテンス・アスペクトを表す副詞をあげた。このような副詞と共に使えるもの、という基準で考えた⁽³⁾。

表8 動詞の種類と「ようになる」

	語	過去	変化	完了	現在	未来	複数の事態による変化
副詞		さっき・昨日・去年	急に・やがて	もう	今	きっと	次々と・しだいに
状態動詞	ある	あった	—	—	ある	ある	—
状態動詞	わかる	わかった わかっていた	わかった わかるようになった	わかった	わかる	わかる わかるようになる	わかるようになる／なった
可能表現	書ける	書けた	書けるようになった	書けた	書ける	書ける 書けるようになる	書けるようになる／なった
思考動詞	思う	思った 思っていた	思った 思うようになった	?	思う 思っている	思う 思うようになる	思うようになる／なった
継続動詞	食べる	食べた	—	食べた	食べている	食べる	食べるようになる／なった
結果動詞	結婚する	結婚した	結婚した ×結婚するようになった	結婚した ×結婚するようになった	結婚している	結婚する	結婚するようになる／なった
結果動詞	落ちる	落ちた	落ちた ×落ちるようになった	落ちた ×落ちるようになった	落ちている	落ちる	落ちるようになる／なった
進展性を持つ動詞	太る	太った	太った ×太るようになった	太った ×太るようになった	太っている	太る	太るようになる／なった

「変化」は過去の形で表現したが、本来は未来も過去もある。「急に」「やがて」のような副詞と共に使う形である。未来になると「急に太る」「急に結婚するなんて」のようになり、変化が活用形として表面化しないため、過去の変化を記した。

「完了」は「タ」を使うが過去の副詞と共に使えないものである。「もう」などの副詞と共に使うものとした。

(38) もう 食事をした。

×(39) 昨日 もう 食事をした。

複数の事態による変化とは「ようになる」の表す変化である。複数の事態や繰り返しを含む変化である。

表8からいくつかのことが言える。

まず、複数の事態による変化は状態動詞「ある」以外は多くの動詞で可能である。

状態動詞「わかる」・可能表現は他の多くの種類の動詞と異なり、単一の主体の変化であっても変化を「ようになる」で表現できる。他の種類の動詞と比較すると、可能表現のほうが特殊な動詞と言える。

継続動詞は単独では変化を表しにくい。「食べ始める」「食べかける」「食べてしまう」などのように補助動詞をつけたり複合動詞にしたりして表現する。「食べた」は丸ごとの事態（高橋1985）で初めから終わりまですべてを表現し、変化は表さないためである。

状態動詞「わかる」と思考動詞「思う」は「思った」と「思うようになった」、「わかった」と「わかるようになった」で変化が表せる。「思った」は何かのきっかけで思考が変化することを表す。「思うようになった」はやはり徐々に考えが変わったことを表し、進展性を含む。

(40) その奇跡を見て、私は神がいると思った。

(41) その奇跡を見てから、私は（しだいに）神がいると思うようになった。

結果動詞・進展性のある動詞はその動詞だけで変化を表すことができる。逆に、変化を表すときに「ようになる」をつけてはいけない。

(42) (体重計を見て) きゃ！ずいぶん太った。

×(43) きゃ！ずいぶん太るようになった。

完了は「もう」と共に使う形として考えた。「タ」と共に使って現在を表現する。

(44) 手紙はもう 書けた。＝書き終わった・書いてある

(45) もう わかった。＝わかっている

完了を表す時、結果動詞・進展性のある動詞では「ようになる」が使えない。

(46) もう 離婚した。

×(47) もう 離婚するようになった。

未来については、状態動詞・継続動詞・結果動詞は「ル」で表す。これに対し、状態動詞「わかる」・可能表現・思考動詞は「ようになる」をつけて表すこともできる。

(48) よく考えれば（きっと）わかると思う。

(49) 一晩寝れば、明日はわかるようになると思う。

継続動詞・結果動詞・進展性を持つ動詞で単一主体の未来を表す場合は「ようになる」はつけられない。

つまり、初級教科書で何かができるようになることを「ようになる」で表現すると教えているが、それは、あるいは意図せずに、変化や未来は「ようになる」で表現できると学習者に考えさせる教え方をしてきたのかもしれない。「ようになる」の基本的な意味は複数の事態・繰り返しを含む変化であるが、単一の主体でも「ようになる」が使える形である可能表現を例として教えてきたため、学習者の中には、主体が何であれ、動詞が何であれ、「ようになる」を使って変化や未来が表せると誤解してしまうものが出た可能性があるのである。

「ようになる」の基本的な意味である複数の事態による変化を最初に教えるように、提示の仕方を工夫するべきであろう。

7 まとめと今後の課題

教師用と考え、いろいろな種類の動詞と「ようになる」の関係を表にしたが、学習が進んだ学習者にはこのような整理の仕方を示すことができるといいと思う。学習者にはどのように伝えていけばいいか、考えたい。

注

- (1) 社会科学と自然科学で前接の述語の性質に違いが見られなかったので、科学的な文章としてまとめた。池上(2001)では「ようになる」の動詞は工学では可能形、農学では受動態、社会科学では能動態が多いと述べており、本稿の調査結果と異なる。本稿は工学・農学のような分類法をしていないため、単純に比較できないが、論文と新書という一般書の違いによる可能性がある。
- (2) 「ル」「タ」「テイル」の用語については、「ル」は非過去形で未来・現在を、「タ」は過去形で過去・変化・完了を、「テイル」は現在を表す。煩雑なので記号として「ル」「タ」「テイル」を使う。
- (3) テンス・アスペクトを副詞と共に考える考え方は日本語記述文法研究会(2007)による。

資料

会話

現代日本語研究会編(1999)『女性のことば・職場編』(女性)ひつじ書房

現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』(男性)ひつじ書房

宇佐美まゆみ監修『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』(BTS)

科学的入門書 日本語教育支援システム研究会編『CASTEL/J』より

自然科学入門書

井上昌次郎(1988)『睡眠の不思議』(睡眠)

都筑卓司(1991)『時間の不思議』(時間)

中原秀臣・佐川俊(1991)『進化論が変わる』(進化論)

米山正信(1991)『化学とんち問答』(化学)

社会科学入門書

高尾一彦(1979)『近世の日本』(近世)

下川浩一(1990)『日本の企業発展史』(企業)

中川剛(1989)『日本人の法感覚』(法感覚)

参考文献

- 安達太郎 (1997) 「「なる」による変化構文の意味と用法」『広島女子大学国際文化学部紀要』第4号 pp71-84
- 庵功雄他 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク pp75-79
- 庵 功雄 (2007) 『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 池上素子 (2001) 「変化を表す「なる」—学術論文における現れ方について—」『社会言語科学』第4巻第1号 pp24-39
- 池上素子 (2002) 「「～ようとする」の意味特徴：「～ようになる」「～に/くする」との比較から」『北海道大学留学生センター紀要』6 pp1-20
- 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 植松容子 (2012) 「日本語教育における「ようになる」の扱い—韓国語母語話者を対象とした文法記述のために—」『学苑』No864 昭和女子大学 pp30-37
- 木村英樹 (1982) 「中国語」『講座日本語学』明治書院 pp19-39
- 江田すみれ (2013) 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』くろしお出版
- 江田すみれ (2015) 「ようになる—学習者の誤用を防ぐために—」『日本語学習辞書科研 研究成果報告』科研費基礎研究 (A) 汎用的日本語学習辞書開発データベース構築とその基盤形成のための研究
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 高橋太郎 (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法』③ くろしお出版
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』笠間書院
- 森 篤嗣 (2011) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目の出現頻度』『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 吉川武時編 (2003) 『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房